探偵×女優

タイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
探偵×女優

【Ｎコード】
Ｎ１１４９Ｖ

【作者名】
タイム

【あらすじ】
新蘭のパラレルです！
新一は探偵、蘭は女優で２人とも１７歳。
有希子は、まだ女優を辞めていなくて夫と息子が居ることも世間には内緒にしてます。

セピア色の思い出

「ふぇぇ～ん・・・ここ、どこぉ・・・うううっ・・・・」
とある、街中で1人の小さい女の子が泣いている
迷子、のようだ
「ううっうっ・・・お母さんどこよぉ・・・」
そんな女の子に1人の男の子が声をかける
「どうしたの？迷っちゃった？」
優しい声で慰めながら言う
「うっ・・そう・・なの・・家もどこか分からないの・・ひっく・・・」
「そっか、じゃあお母さんのこと探そうか？」
「う・・うん！」
泣き笑いの顔でコクンと頷いた

「蘭！！どこに行ってたのよ！」
「お母さん！！！」
女の子が女の人に抱きつく
「ふぅん、蘭って名前だったんだ」
「うん！今日はありがと！ね、名前は？」
「僕？僕は新一だよ。」
「新一？いいお名前だね！」
「蘭も綺麗な名前じゃない！」
クスクス・・と2人で笑う
「蘭のこと連れて来てくれてありがとう、新一君。じゃ・・・」

「じゃあね！新一！」
「じゃあな！蘭！」
小さい頃の思い出・・・・・・・・・・・・・

銃声

パアンッ！！！！

「きゃあああああああああ！！！！」

「蘭ちゃんっ！」

「え～、被害者は毛利蘭さん１７歳。銃弾を少しよけ、掠り傷程度だがこれで撃たれたのは５回目っと・・・」

そこには、頼りなさそうな刑事と美人な女の人がいる

まぁ、野次馬などもいるんだが・・・

「そ、それより蘭ちゃんは大丈夫なの？掠り傷っていっても、倒れちゃったじゃない！」

「あ、ええ！大丈夫です。倒れてしまったのは撃たれたショックによる軽い貧血ですから・・・」

「そうですか・・・良かったです」

「あの、あなたは？」

「私？私は、藤峰有希子。今日は、蘭ちゃんとご飯食べに行こうとしてたのよ」

その言葉にブッと噴出し、

「ふ、藤峰有希子ぉぉぉ？？」

と叫んだ

「あ、あの大女優の？」

「そうですけど、今は蘭ちゃんのことのほうが優先でしょ」

「あ、そうですね。」

「蘭ちゃん、もう5回も撃たれたって言ってたけど、そんなに撃たれたの？」

「ええ、1回目が帝丹高校からの下校途中に。2回目が1人で家に居たとき。3回目が撮影場所に行くとき。4回目がドラマの撮影中に。5回目が今日のご飯を食べに行く途中ってとこですね」

「そ、そんなに！？じゃあ、今までは反射神経で弾をよけてたの？」

「みたいですね・・・」

「じゃあ、危ないじゃない！ボディガードとか付けたほうがいいん

じゃないの？」

「僕もそう思ったんですけど、毛利さんに嫌だ、厳つい人と居ると何か嫌だって言われちゃって・・・」

「じゃあ、厳つくなくて一緒にいて違和感の無い人を探せばいいじゃない？」

「そんな人いるんですか？」

刑事が怪訝そうに聞く

「居るじゃない！新ちゃ・・じゃなくて、新一君よ！帝丹高校だし」

「でも・・・受け入れてくれますかね？」

「そこらへんは大丈夫よ！私が何とかするから」

「そうですか？なら・・・」

プルルルル・・・プルルルルル・・・

『もしもし、工藤です』

「あ、工藤君？ちょっと来てほしいんだけど・・・」

電話

「もしもし、高木です」

『あ、高木さん。事件ですか？』

「まぁ、そうなんだけど・・・少し頼みたいことがあってね」

『はあ・・・何ですか？』

「毛利蘭って知ってるかい？」

『まぁ名前位なら』

「その子が今狙われていてね・・だから、まぁボディーガードみたいなことをしてほしいんだが・・・」

『嫌です』

「・・・藤峰さんもやって、とおっしゃっているからさ・・・」

『・・・藤峰って。マジかよ・・・・・・』

高木はファンなのかと思ったが、電話から聞こえてきたのは盛大なため息

『じゃあ、やるしかないですね・・（後でぶっ殺してやる・・・）』

「あ、ホントですか？じゃあ米花総合病院で・・・・」

『分かりました・・・はあっ・・・・・』

「了承してくれましたよ」

「でしょー？私の名前出すといけるでしょう？」

「でも、何でですかね？電話の声ではファンって感じじゃ無かったですし・・」

「まぁその辺はトップシークレットということで♪私たちも行きましょ！」

出会い

「あ、工藤君！」

駆けてきた新一に高木が手を振る

新一はペコンと頭を下げる

「こんにちは・・それで？毛利蘭っていう人はどこに？」

「あ、こっちですよ」

ガチャッ

高木がドアノブに手を掛け、ドアを開ける

そこには蘭と有希子が居た

そして、新一が中に入る

蘭と目が合うと・・・

「「あっ・・・」」

2人して固まる。

固まった2人を見て、高木が不思議そうに聞く

「どうしたんですか？」

「あ、いえ・・・なんでもありません」

何でもありそうな顔で目をそらす新一

「は、はぁ・・・あ毛利さん、こちらが工藤新一君です。もう5回目なのでちょっとしたボディーガードを付けたほうがいいと思いまして」

「で、でも！私なんかに有名な人を付けちゃ・・・」

「あ、それなら大丈夫だと思いますよ。同じ学校なので」

「そうなんですか？なら・・・あの、よろしくお願いします」

おどおどしながらぎこちなくお辞儀をする蘭

「こちらこそ、よろしく。」

素っ気無く返す新一

「え～工藤君は学校の行き帰りや撮影などに付いていってもらい、夜は家まで送ってもらう。で、いいですかね？家には両親いるんでしょう？」

「あの・・いえ、それが両親共に外国に行っていて居ないんです・・・」

「ええっ！ど、どうしましょう・・・」

「工藤君の家に住まわせたらどうかしら？」

いきなり、佐藤刑事の声がする

「さ、佐藤さん！？どうしたんですか？」

「少し寄っただけよ。・・それより、さっきの話。いつも工藤君の家に送っていくとき、すっごい広い家なんだもの。1人くらい増えても大丈夫なんじゃない？」

その言葉にビクッと反応し、有希子のほうを振り向く新一

有希子は新一に向かって、口を動かす

”まぁ仕方ないんじゃない？蘭ちゃんにはばらしちゃうことになるけど・・・”

”いいのか？”

”蘭ちゃんだからね！”

「工藤君大丈夫かしら？」

「あ、はい！大丈夫ですけど、毛利さんは大丈夫なのか？」

蘭に話を振る

「え？わ、私は別にオッケーです・・・」

「じゃあ、決まりですね！」

高木が嬉しそうに言う

その時、医者が入ってきた

「だいぶ良くなりましたし、帰って大丈夫ですよ」

こうして、新一と蘭（と有希子）の生活がスタートしたのだった・・・

「じゃ、工藤君。よろしく頼むよ」

「わかりました」

「では・・・」

車に乗り込む高木

その助手席では佐藤が手を振っている

2人にお辞儀をして、有希子と蘭の乗っているタクシーに乗る

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

無言の時間が過ぎる

蘭は単に初めてなので恐縮していただけ

新一と有希子は話したいことがあるけれど、運転手が居る前では話せない

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
」」

刻々と時間が過ぎてゆく

そして、あっという間に工藤邸に着いてしまった

「うわ・・・おっきぃ・・・・」

「やっと、邪魔者が居なくなったな」

「え？邪魔者ですか？あの運転手さん？」

「そ。アンタに話さなきゃいけねーんだけど・・・ま、中に入って話すか」

鍵を取り出し、カチャッと開け中に入る

そしてリビングに行き、そこ座ってと蘭に言った

「新ちゃ～ん！話すのぉ？」

有希子がパタパタと駆けて来た

「うるせーなオバサン・・・」

「ちょっと！私はまだオバサンじゃないわよ！」

「こっちから見たら十分オバサンだっての！」

「ひどいわ新ちゃん！」

「あ、あの・・・」

遠慮がちに蘭が声を掛ける

「「あ・・・」」

「ゴメン。えっと、まず最初にこのオバサンは俺の母さん。ホントは結婚してるんだけど世間には内緒にしてるんだ」

「ええっ！有希子さん結婚してるんですか！？」

「そうよん♪あ、そうだ！私明日優作とアメリカ行くから新ちゃん2人暮らし頑張ってね！」

「ちょ！待て！ンなこと聞いてねーぞ！！」

「だって、言ってないもの」

「そういう問題じゃねー！」

「それと蘭ちゃん！敬語は無しだからね」

「わ、わかりました・・・」

「じゃ、そゆことで♪」

フンフフン♪と鼻歌を歌いながら去っていく有希子

そんな有希子を呆然と見る新一と蘭

１７歳の現役高校生が男女２人で１つ屋根の下に暮らすことになったのだった・・・

朝

次の日・・・

「じゃあね～！！新ちゃん蘭ちゃん！仲良くやるのよ～！！！」

朝早くからアメリカへと嵐のように去っていく

「「・・」」

長い長い沈黙

その沈黙を破ったのは・・・

「あの・・・私、何かすることある？」

蘭だった

「んー・・・お前、飯つくれるか？」

「え？まぁ、1人暮らしだったから・・」

「んじゃあ、朝飯頼むぜ。俺、料理はからっきしだからな」

「あ、分かりました・・・」

何分か後・・・

「口に合うか分かんないけど、一応出来ました・・・」

そう言いながら、朝食とは思えないほどの豪華な食事を出してくる

「何かすげーな・・・」

蘭に感嘆の目を向ける新一

「そう？これ、有希子さんに教えてもらったんだ」

「へー母さんがねぇ」

そう呟き、パクッと食べ始める

「ん！うまっ」

「ホ、ホント！？良かった～」

「なぁ？ちょっと聞きたいんだけどさ・・・」

そこで、言葉を切り不思議そうに切り出す

「何か俺たちって会ったことある？」

「あ、それ私も思った！最初に会ったときに不思議な感じがしたんだよね・・・」

「んじゃ、やっぱ会ったことあるんだな」

「小さい頃に遊んだりしてたのかな？」

「かもな」

そのまま2人で話しながら食を進めて行き、家を出る

登校中思い出したように新一が言う

「あ、そうだ。お前って2－Aだろ？俺、2－Bだからその間俺の友達に頼んであるから。」

「分かった！」

「まぁ話しやすいヤツだから。クラスでも目立ってんじゃねーか？」

「ふーん」

友達

今、新一と蘭は2人で2ーAまで歩いている

学校一の美男美女が2人で歩いているものだから、生徒たちは好奇の目で見ている

まぁ当たり前だろう

周りの人たちにジロジロ見られながら2ーA着く

ガラッ

新一がドアを開ける

パッと中に居た生徒たちの目が集まる

「く、工藤君!?」

女子が黄色い声を上げる

「何?もしかして、私たちに会いに来たのぉ?キャー嬉しいっ」

キャーキャー騒ぐ女子たちを尻目に新一が教室内をキョロキョロ見回す

そして、「あ居た居た。」といいながら1人に近づく

「で？私に頼みって何よ」

新一が近づいた人が言う

「まぁ色々と・・・ちょっと、出てくれるか？」

その人を引きずり出してくる

「色々って何よ！！」

ビービーギャーギャー文句を言う

そんな人を無視して蘭に紹介する

「コイツは鈴木園子。知ってるだろ？何しろ五月蠅いし・・・」

「何よその言い草！あれ？毛利さんじゃない。どうしたの？」

たった今蘭に気が付いたように園子が言う

「俺がボディーガード頼まれたんだ。何か色んなとこで狙われてるから、学校の間は園子に見ててもらおうと・・・」

「あら。そんなこと？もっと面倒なのかと思ったわ・・・」

「んじゃ、頼むぜ！帰りはまた迎えに行くからさ！」

「あ、はい！」

改まったように園子が話し出す

「てことで、よろしくね？毛利さん」

「あ、こちらこそお願いします！」

「私も敬語使わなくて良いのよ～肩っ苦しいの嫌いだし」

「わかりまし・・・分かった！」

「それでよし！」

ニカッと笑う園子

「ま、中に入ろっ廊下じゃ色々とあるしね」

中に入った途端・・・

「ねぇ！毛利さんと工藤君って何の関係なの？？」

「もしかして付き合ってる！？」

クラスメートからの質問が早速飛んでくる

「そ、そんな関係じゃありません！・・・私、好きな人いるし・・・・・・」

「ええっ！居るの？？誰、誰誰？？」

「1回しか会った事無いから、分かんないです・・・ここに居るか

もしれないし、全然違うところにいるかもしれないし」

「なーんだ、つまんないの・・・」

サアッと蘭の周りから人が離れていく

「ふぅ～」

気が抜けたようにため息をつく

「やっぱああいうの苦手よね～」

「鈴木さんも？」

「うん、うちの事で時々なるのよ・・ああいうの。面倒よね～こっちの事情なんだからほっといてよ！って感じぃ～」

「私もそう思う！ドラマとかで共演したときとかすっごい聞かれるんだ。あれって結構嫌なんだよね・・・」

「あら、毛利さんって結構話せるのね！何かいい友達になれそう」

「私も！」

「ね、初恋の人の話聞かせてよ！」

「えぇ！？・・・あ、あのね。小さい頃迷子になっちゃったんだ。その時に助けてくれた男の子が居たんだ。すっごい優しくてかっこよくて・・・確か、しんいちって名前だったと思うんだけど」

「ふぅん・・・」

「どうしたの？」

「ううん・・似たような話誰かから聞いたような気がするんだよね～それも、それの男の子バージョンで」

「え～ホント！思い出したら教えて！」

「分かったわ～」

性格が正反対の２人

意外と仲良くやっていけそうである

事情

ガラッ

「よっ」

Ａの教室に新一が顔を出す

「あ、来た来た」

顔を見て園子と蘭がいそいそと仕度を始める

「まだ、仕度してなかったんか・・・」

「いいでしょ別に～」

蘭が口を尖らせながら言う

「駄目とは言ってないぜ」

「はいは～い！分かりましたよーだ」

「ほら！帰るよ～」

園子がパンパン！と号令をかける

「あ～待って！」

「あと１０秒ね！１０・・９・・８・・」

「出来た出来た！帰ろ～」

「アンタを待ってたのよ！」

「ゴメンゴメン」

大分、新一と園子に慣れてきた様子の蘭

その姿に新一がクスッと微笑む

「何笑ってるの？」

「別に～」

園子がニヤニヤと言う

「ほら！さっさと帰んなきゃ！！」

3人で歩き出す

「でも、凄いビックリしたな～毛利さんってこんなに喋れるんだ！って感じ～！」

園子が口火を切る

「いつも話してなかったもんね・・・」

少し悲しそうに笑う蘭

「いい友達出来たしよかったよかった！」

「あいかわらず園子はうっせぇな・・・」

「いいじゃなーい！楽しいんだから！」

「あっそ」

2人の会話をうらやましそうに見る蘭

「毛利さん、どうかしたか？」

いきなり話を振られ、少し赤くなりながらも告白する蘭

「あ、あのね！私って小さい頃から子役とかで何ていうか有名？だったから、全然友達が居なかったの・・・中学まで話しかけてくれた子なんて2人しか居なかったし、それでも”蘭ちゃん”止まり。呼び捨てで呼んでくれたくれた子なんて今どこで何してるかもわかんないんだ。だから何ていうかその…」

「”蘭”って呼んでほしいってか？」

新一が蘭の言葉を引き継ぐ

「その気持ち俺にも分かるぜ。小学生までは居たけど、中学生から探偵やり始めて有名になりだしたから探偵友達しかいねーな今」

「そういえば私も！ほら、私って鈴木財閥の娘でしょ？だから皆、敬遠するっていうか…ねぇ？」

「そ、そうなの？じゃ、じゃあさ”新一”” 園子”って呼んでもいいの？」

「ああ！じゃあ俺も”蘭”って呼ぶぜ？」

「私も”蘭”って呼ぶわね！…でも、”新一”よりは”新一君”のほうがいいわね」

「確かにな…園子に”新一”って呼ばれると寒気がするぜ」

「ひどい言い草ねぇ」

「でもそうだろ？蘭もそう思うだろ？」

その一言にパッと頬が染まる

「うーん…園子は君付けのほうが合うような気がするなぁ」

「やっぱ蘭もそう思う？」

「うん！あ、そうだ！今度さっき言ってた友達に会ってみない？」

「お！いいな！んじゃ、俺も親友呼んでくるか！」

「私は彼氏呼ぶわね～」

「えぇ？お前彼氏いたのかよ！？それで？」

「そうよ！悪いかしら？とっても格好良いのよ～！！」

「楽しみだなぁ～じゃあ連絡して来なきゃ」

早速その友達に電話を始める

「ね、新一君」

「ん？」

「アンタの好きな人ってどんな人だったけ？」

「前話しただろ？迷子になってるところを助けたんだけど、そん時の笑顔が凄く可愛かったって言わなかったか？」

「名前覚えてる？」

「んー…”らん”だったかな？」

「ふぅん…」

ニヤニヤと意地悪く笑いだす園子

「それがどうかしたか？」

「べっつにぃ～」

ニヤニヤを止めない園子に不機嫌な新一

2人の事情を知った園子は（これでからかう対象が出来たわ！）と内心ほくそ笑んでいた

まずは1組目

蘭の友達と園子の彼氏、そして新一の親友たちと会う日・・・・・・

「今日楽しみだね！」

「2人とも良い奴だから仲良くなれると思うぜ」

「私の友達、新一にすっごい似てるんだ。性格はそうでもないかもしれないけど」

「私の彼氏はとーってもかっこいいんだから！惚れちゃダメだからね！！ま、惚れはしないだろうけど！相思相愛の人が居るんだからね♪」

「「え？」」

「何でもない何でもない！こっちの独り言！」

「「？？」」

ピーンポーン

工藤邸に無機質な機械音が流れる

「お、早速来たか」

新一がドアを開ける

「よう！工藤！」

「工藤君、久しぶりやね！」

来たのは関西弁を話す、ノリのよさそうな2人組

「お、この姉ちゃんが工藤んとこに居る姉ちゃんか。工藤、やらしいことしてないやろなぁ？」

「工藤君がそんなことするはずないやろ！平次やないんよ！それより、アンタ毛利蘭とちゃう？」

「え？そうだけど・・・もしかしてあなた遠山和葉さん？」

「そうや！アタシ、アンタのせいで仕事とられたことあるんやで！ウチのマネージャーが言ってたんやけど、自分勝手に監督に頼み込んでアタシの役とったんやってな！」

和葉の剣幕に少々驚く、新一を始めとする東京組3人

「ち、違います！そういうのやるのは私のマネージャーです・・・」

「は？」

「私のマネージャー何ていうか、あのちょっと？強引で・・・」

「アンタがそうしてって言ってるわけとちゃう？」

「絶対に違います！それに、私あんまり仕事したくないタイプで・・・」

「ホンマやな？」

「本当です！」

じっと訴えるような目をじぃーっと見つめ、ニコッと微笑む和葉

「うん！アンタは嘘ついてる目しとらん！ゴメンなぁ・・・いきなり怒鳴っちゃったりしてなぁ」

「ううん！全然大丈夫ですよ。こういうの慣れてるから・・・」

「和葉ちゃんって他の人にもそう言う風に怒るんだなぁ服部にしか怒ってるの見たことなかったからな」

しみじみと新一が呟く

恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべる和葉

ピンポーン

再度音が響く

「次は誰かなぁ？」

「ちわーっす！」

「こんにちは～！」

2組目！

「ちわーっす」

「こんにちは～」

男の子と女の子の声が聞こえてきた。

「あっ！快斗君と青子ちゃんだ～！」

蘭が嬉しそうに声を上げる。

「よっら～んちゃん♪」と、快斗

「久しぶりだね～」と、青子

「ホントだね～」と、蘭

「よろしく！」と、新一

「！？」と、和葉

「！？！？」と、平次

「！？！？！？」と、園子

「く、工藤が2人！？」

「蘭ちゃん双子やったんか！？」

「蘭が２人いるわ！」

大阪２人組が叫んだ。

「「え、２人？」」

「「ん？双子ぉ？」」

不思議そうに４人が言う。

「え、双子じゃないん？・・・ただ単に似とるだけ？」

「似てる？・・・そーかぁ？」

「俺とこの新一ってやつが？」

「あ～確かに！」

「似てるっちゃ似てるね～」

蘭と青子も２人を見比べながら言う。

「「それは、オメーたちも一緒だ！！・・・・・・・え？」」

「あ、ハモったね～」

「やっぱり似てるんだよ！」

「・・・なんかよくわからないけど、よろしくな」
「こっちこそ。他人だけど激似らしいからなぁ」
「でも、性格だけは似てないと信じよう・・・」
「・・・おぅ」
そんな2人を見て、蘭と青子がクスクス笑う。
平次と和葉と園子はポカンとしたまま。
「てか、やっぱり蘭たちも似てるぞ？」
「前からいっつも思ってたけど、青子のほうが子供だっていうところ意外あんまり変わんねーよ」
ケッケッケと笑いながら快斗が言う。
「青子は子供じゃないもん！」
「いや、自分のことを青子っつってる時点で子供だな」
「アンタは、マジックバカだもんね～バ・か・い・と♪」
「俺はバカじゃねーよ！なぁア・ホ・子ちゃん☆」
「あ～青子はアホじゃないから！バ快斗！！」

「なんだよ、アホ子！」
「何よ、バ快斗！」
「お子様アホ子～」
「バカバカバ快斗！！」
「マヌケアホ子！！」
ギャオギャオ言い合いをいきなり始めた2人。
蘭以外、目を点にしながら見守る。
「あ～あ、2人も変わってないなぁ」
「・・・前からアイツらこんなだったんか？」
「うん、小学校の時からこんなだったよ」
「・・・ハッキリ言って服部たちと似てるかも」
「はぁ！？オレらはこんなんちゃうわ！」
「ウチたちはもっと違うわ！」
「じゃあどんなんなんだぁ～？」
ニヤニヤ笑いながら新一が言う。

「・・・・・・・・・・・・・オレは黒羽みたいに言い返さんわ」

「え～！いっつも言い返しとるやない！」

「和葉の認識は甘いわ、オレはオトナやから。」

「はあ！？アンタがオトナのわけないやないの！このアタシが言ってるんやで？」

「なんで和葉が言っとったらそーなるん？」

「アタシの幼馴染やろ？この色黒推理オタク！」

「なんやと！オレは色黒と・・・ちゃわないか。推理オタクとちゃうわ！」

「推理オタクやろ！約束いっつもすっぽかしとるくせに！」

「ケーサツに呼ばれるんやから仕方ないやろ！」

「やから探偵っちゅうのはイヤなんよ！」

こっちの幼馴染2人も言い合いが始まる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

東京組3人は呆れかえっている。

「・・あんま変わんないような気がするんだけどな」

「・・・同感、青子ちゃんたちのこと子供って言えないと思うな」

「・・・アンタたちもそうなりそうだけど」

「え？何でよ！？」

「だってさぁ～・・・・」

雑談が始まりかけた時・・・

「えーっと、こんにちは・・・・」

誠実そうな声が聞こえた。

2組目！（後書き）

あー久しぶりに更新しました。
こっちは何故か書ける・・・

最後の1人！

「キャ～！真さんだわぁ～」

「あ、園子さん。それと、皆さん改めまして京極真です。よろしくお願いします」

色黒の本当に誠実そうな人が入ってきて、礼儀正しくお辞儀をする。

「「「よ、よろしく・・・・・・」」」

余りの礼儀正しさに驚く男子3人。

「「「よろしくお願いします！」」」

それぞれの人をジト目で見ながら元気良く挨拶する女子3人。

「お、なんか元気になった」

快斗が言う。

「べっつにぃ～・・・誰かさんとは大違いだなあと思っただけだけど？」

フンッと青子が返す。

「真さんってカッコいーでしょ！！キャハ☆」

ハイテンションの園子。

「あの、失礼ですけど、この女(園子)のどこが・・・？」

新一が恐る恐る切り出す。

「あっ新一君ひどくないッ！？」

「え・・・！いや、あの、その・・・・・・」

口ごもる真。

顔が真っ赤っ赤になっている。

「！？・・・か、彼氏なんだろ？」

「そうよん♪」

「んじゃ、何故返せない・・・？」

「真さんはぁ、純情だから！」

「・・・園子とよく合うなぁ」

「あ、いえそれほどでも」

『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』』

皮肉にも普通に返す真に少々沈黙する６人。

「け、喧嘩は？しないの？」

「いえ、全然しませんよ」

「じゃ、じゃあデートとかはするん？」

「そうですね・・・園子さんは元々色んなところに行ってるので・・・」

「プレゼントとかはするんですか？」

「あ、はい！少しはしますよ？」

「あの、年上・・・ですよね？」

「あ、１８歳ですけど」

「ウチらより年上やん！なんで敬語使っとるん？」

「えーっと、癖だから・・・ですかね？」

「く、癖・・・園子とはどこで会ったんですか？」

「私、一応拳法やってるんで、園子さんの家のパーティーに呼ばれて、そこで・・・」

女子組みからどんどん質問されるにも構わず、丁寧に答えていく。

「ああ～、京極さんは優しいねぇ・・・平次とは大違いや」

「何や、オレも優しいで」
「快斗なんかよりも断然良い人だよ～」
「俺様が良いヤツじゃなかったら、世の中のほとんど悪いヤツだぜ」
「全然面倒くさがりやじゃないね」
「それ、俺のことか？」
「ウフフ～♪でしょでしょ～」
「園子、良い人見つけたね！」
「ホントホント～」
「あ、そういえば・・・」
真が思い出したように言った。
「この後、何処かに行くんですか？私が最後でしょ？」
「あ、そういえば・・・どっか行こっか！」
「・・どこ行くの？」
「そういやぁ・・・俺、高木さんからトロピカルランドの無料チケット貰ってるけど」

「高木さん？」

「ん、刑事さんだけど？」

「（何故刑事さんに・・・）いいんじゃね？楽しそうだしよ」

「みんなもＯＫなんか？」

「勿論！」

「楽しそうやなぁ」

「行くに決まっとんやろ？」

「面白そ～♪」

「行くいく～！」

最後の1人！（後書き）

あ～、やっぱり無理。
書きたいように書けん・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1149v/

探偵×女優

2011年10月10日12時04分発行